

「アジア未来会議」が今月中旬、5日間にわたりフィリピンのマニラで開かれ、大会会長として出席した。東アジア諸国においても、北東アジアの日本、中国、韓国の3カ国においても、新しい前向きな風が吹き始めていることを肌で感じる事ができた。

会議はグローバル化に伴うアジアのさまざまな問題や、科学技術の開発や経営分析だけでなく、環境、教育、芸術文化な社会のあらゆる次元において多面的に検討、意見交換することを目的に開かれた。諸外国から日本の大学院に留学する外国人学生に博士号取得まで奨学金を給付するなどの活

時評

動を展開している海運国際交流財団の主催で、今西淳子さんが常務理事として活動を主導している。

これまでタイ、インドネシア、日本、韓国で1年おきに開かれており、今回が5回目。今年のテーマは「持続的共有型成長―みんなの故郷、みんなの幸福」で、世界に広がる富の格差に肉薄しようというものである。

会議は財団から過去に奨学金を受けた20代後半から30代を中心に約300人が参加した。仏教徒の多いタイやミャンマー、イスラム教徒が多数のインドネシアとマレーシア、キリスト教徒が多数のフィリピンなど多様を極めたが、中東地域と違い東南アジアのイスラム教徒は、概

して溫和なイスラムの立場を取る人が圧倒的に見られた。イスラムの女性たちには顔をブルカで包む人が多くいて、おしゃれな色彩が多かった。

会議では過去の4回に劣らず、国境や文化を超えて、率直からの参加者はオンライン技術の利用による平和教育のシステムづくりについて熱く語った。北九州中央大学博士課程の日本人女性はその国の文化や歴史によつて、法に基づいて和解を進めるのが、あるいは共

いがあつた。方説した。こうした意見が聴き取れて、参加者の多くが複雑化する現代アジアの未来について少なからず希望を持っている様子が見えられた。

東アジアに吹く新しい風



で生き生きとした若者らしい意見が交わされた。特にそれぞれの職業や専門領域を反映した意見は広範囲にわたっていた。

タイから参加した若い仏教徒は「内在的な平和こそが外的平和の基礎になる」という意見を表明した。インドネシア

同体の伝統に重きを置くかなど平和を構築していく過程に違

新しい歴史観の中核的な存在のように見えた。

特に19世紀における日中韓3カ国の相互接触について、該博な知識に基づいて率直な議論が行われ、これまでとは違った新しい見方の可能性を伝えているものだった。

戦後の欧州においてドイツやフランスなどが国家を超えた共通の歴史観に到達できたように、東アジア全体に共通する歴史観が誕生することが不可能ではないと十分に手応えを感じられる内容であった。もちろん歴史の問題はいつの時代も錯綜して複雑なので、一朝一夕に完成するとは思われぬ。

今回の「アジア未来会議」は東アジア地域共通のグローバル化時代が到来しつつあることを告げてくれるものではあるが、それが民族主義や国粹主義を決定的に超えるものであるかはわからない。同時に21世紀初頭にあつた混乱や対立がこれからも増強する危険がなくなるのかも不透明である。

だが、多くの若い学究や幅広い職業に従事している人々との間には、先行世代の人々と違って偏見がそれほどなく、国境を超えた見方がじわりと広がりがつつある。会議での意見交換はその一つの例にすぎないとはいえず、現代アジアに生きる者たちに明るい希望の燦光のようなものを感じさせたといえる。

(元国連事務次長 大館田昌良)